

〈原著論文〉

総合的な学習の地域協働型教材開発と 評価・改善に関する実証的研究 —総合的な学習「宇治学」第3学年「宇治茶のステキをつたえよう」 の質問紙調査の分析—

橋本 祥夫*¹

京都府宇治市では、全市の小中学校の「総合的な学習の時間」（以下、総合的学習）を「宇治学」と称し、地域素材や地域活動をもとに学習する時間としている。しかし、指導に関しては、教科書がない領域であり、指導者側の負担が大きく、探究学習が十分にできていないことが大きな課題となってきた。

本研究は、平成26年度から、京都文教大学地域協働研究教育センターの「地域志向協働研究」として宇治市教育委員会と共同研究を行ってきた。共同研究では、宇治市内の全ての小中学校で使用する「宇治学」副読本を作成するとともに、指導計画、教師用指導の手引き、ワークシートを作成し、その活用方法を検討した。平成29年度からは、これまでの共同研究を基盤に、授業実践と学習効果の実証的検証、及び評価・改善をし、地域協働型教材開発を行ってきた。

本研究では、平成29年度末に、「宇治学」の実施状況を調査するため、副読本を活用して学習をした宇治市内の全ての小学校の3年生児童とその学校を対象に質問紙調査を行い、「宇治学」で求められている資質・能力を身に付けるためにはどのような指導が必要なのかを明らかにした。

なお、本研究を実施するにあたり、平成29年9月、試験的に4校で質問紙調査を実施した。その4校の試験的調査は、本研究の調査のプレ調査として位置づけ、分析した。その際の分析は、4校の比較に焦点を当てたが、本研究では、全市を対象とした調査であり、「宇治学」全体の傾向を捉えるものとして、地域協働型学習としての「宇治学」の評価を行う。

Key words：総合的な学習の時間、地域協働型学習、質問紙調査、実証的研究

1 問題の所在と研究目的

京都府宇治市では、全市の小中学校の「総合的な学習の時間」（以下、総合的学習）を「宇治学」と称し、地域素材や地域活動をもとに学習する時間としている。しかし、指導に関しては、教科書がない領域であり、指導者側の負担が大きく、探究学習が十分にできていないことが大きな

な課題となってきた。

本研究は、平成26年度から、京都文教大学地域協働研究教育センターの「地域志向協働研究」として宇治市教育委員会と共同研究を行ってきた（橋本ら、2016）。共同研究では、宇治市内の全ての小中学校で使用する「宇治学」副読本を作成するとともに、指導計画、教師用指導の手引き、ワークシートを作成し、その活用方法を検討した。平成29年度からは、これまでの共同研究を基盤に、授業実践と学習効果の実

*¹ Yoshio HASHIMOTO
Faculty of Clinical Psychology Kyoto Bunkyo
University

証的検証、及び評価・改善をし、地域協働型教材開発を行ってきている¹。

本研究では、平成29年度末に、「宇治学」の実施状況を調査するため、副読本を活用して学習をした宇治市内の全ての小学校の3年生児童とその学校を対象に質問紙調査を行い、「宇治学」で求められている資質・能力を身に付けるためにはどのような指導が必要なものを明らかにした。

なお、本研究を実施するにあたり、平成29年9月、試験的に4校で質問紙調査を実施した。その4校の試験的調査は、本研究の調査のプレ調査として位置づけ、分析した(橋本, 2018a)²。その際の分析は、4校の比較に焦点を当てたが、本研究では、全市を対象とした調査であり、「宇治学」全体の傾向を捉えるものとして、地域協働型学習としての「宇治学」の評価を行う。

2 研究仮説

「宇治学」で身に付けさせたい資質・能力は、児童の生活・学習習慣と関連があり、資質・能力に応じて、どのような生活・学習習慣が望ましいのかが分かれば、資質・能力を効果的に身に付けさせることができる。また、地域協働型学習では、学校の教育活動や地域との関係に影響を受けるので、その関係性を明らかにすることにより、学校や地域の実態に応じた地域協働型学習が実践できる。

3 総合的な学習「宇治学」第3学年「宇治茶のステキをつたえよう」の概要

本単元の単元目標は、「『ふるさと宇治』の特産品『宇治茶』について関心を持ち、『宇治茶』の魅力を進んで調べ発信しようとする。」である。

3年生からスタートする「宇治学」では、3年生で宇治茶生産と茶文化、4年生で生活環境

や自然環境、5年生で地域福祉・ノーマライゼーション社会、6年生で地域の歴史・史跡・伝統文化等や観光をテーマに取り上げ、宇治の魅力について学ぶ。3年生では、「宇治学」のスタートであり、「宇治学」とはどのような学習なのかを子どもたちに理解させるところから学習がスタートする。

宇治学を実践するにあたり、児童への宇治学を行うにあたってのレディネス分析(橋本, 2018b)を行った。宇治茶イコール抹茶という認識を持っている児童が多数いた。しかし、宇治茶はすべて抹茶ではない。抹茶が有名ではあるが、宇治茶には玉露や煎茶など様々な種類がある。児童の認識とのずれから、学習問題を設定しやすい。

このように、多くの児童が知っている「宇治茶」は児童にとって取り組みやすいテーマであり、宇治で有名な特産品なだけに、地域学習として調べやすい。3年生の社会科の学習や総合的学習でも従来から宇治茶を取り上げてきているので、これまでの学習指導の経験を生かすことができ、学校としても取り組みやすく、教師も指導しやすい。また、地域に茶園がある地域も多数あり、体験活動や見学がしやすく児童にとって楽しい学習である。

4 研究方法

4-1 調査の枠組み

児童の質問紙は、「宇治学」の目標と育てたい力(資質・能力)の評価観点の達成状況を把握するため、評価観点を基に作成したものである。資質・能力の評価観点は、「学習方法に関すること」「自分自身に関すること」「他の人や社会とのかかわりに関すること」の3つの観点である³。さらに、資質・能力と生活・学習習慣に関連があると考えられることから、生活・学習習慣に関する学校質問紙も行った⁴。質問紙は、全国学力学習状況調査の質問紙を参考に、

「宇治学」を実践する上で関係がありそうな項目を設定した。

また、学校の教育活動や地域との関係が児童の資質・能力に関係していると考えられることから、学校の教育活動や地域との関係を問う学校質問紙も実施した。

4-2 調査の概要

宇治市内の小学校（宇治市内全小学校22校のうち21校で実施。1校は学校事情により「宇治学」未実施のため調査対象外）を対象に、宇治市教育委員会の協力を得て、学校質問紙調査及び第3学年児童（1622名）を対象に児童質問紙調査を実施した⁵。実施時期は平成29年度の「宇治学」実践終了後である。なお、「宇治学」の実施時期は学校によって異なるので、質問紙の実施時期も学校によって異なっている。

4-3 児童質問紙の概要

4-3-1 「宇治学」で育てたい資質・能力に関する調査

「学習方法に関すること」は、総合的な学習の探究活動の学習過程である「課題発見」、「情報収集」、「整理分析」、「まとめ・表現」に合わせ、「課題発見・設定」、「情報収集・分析」、「思考判断」、「表現・省察」の4つの資質・能力を設定した。

「自分自身に関すること」は、「宇治学」を通して、児童・生徒に身に付けさせたい力として、「意思決定」「計画実行」「自己理解」「将来展望」の4つの資質・能力を設定した。

「他者や社会とのかかわりに関すること」は、地域学習である「宇治学」として重要な資質・能力である。様々な地域の人と交流し、それぞれの人の立場を理解するための「他者理解」、地域の一員として、共に考え、これからの地域の将来を担っていかうする態度としての「協働・共生」、学んだことを生活に活かし、地域で活動する意欲としての「社会参画」という3つの資質・能力を設定した。

回答は、「そう思う」「どちらかというと思う」「そう思わない」「思わない」の4択で行った。

4-3-2 望ましい生活習慣・学習習慣に関する調査

資質・能力は生活習慣・学習習慣と関連があるという仮説にたち、宇治学を実践するに当たって「望ましい生活習慣・学習習慣」と考えられる項目を質問項目に入れ、資質・能力と生活習慣・学習習慣に関連性があるのかを調査した⁶。「達成力」「挑戦力」「発信力」は資質・能力を支え、伸ばすために、「問題意識」「社会参加」「社会貢献」「ホスピタリティ」は地域とかわるために、「NIE」「時事問題」「読書習慣」は地域について考える力をつけるために必要であると想定した。このような生活習慣・学習習慣が身につけていることが、宇治学で育てたい資質・能力を育成する上で重要であるという仮説のもと、関連性を調査した。

回答は、資質・能力同様「そう思う」「どちらかというと思う」「そう思わない」「思わない」の4択で行った。

4-4 学校質問紙の概要

4-4-1 学校・地域の特性に関する調査

児童の資質・能力や生活習慣・学習習慣は学校の取り組みや地域の特性などの教育環境に影響を受けることが想定される。そこで、児童の質問紙とは別に、調査対象の学校を対象に学校・地域の特性に関する質問紙を実施し、学校・地域の特性によって、児童の質問紙の結果にどのような関係性が見られるのかを調査した⁷。

学校質問紙は、学校（地域）の特性を問う設問として、「PTA活動」「学校支援ボランティア活動」「地域への学校理解」「地域への情報発信」の4つの項目からなる。

また、学習の状況を問う設問として、「外部講師」「授業サポート」「情報教育」「社会参画授業」「地域学習」の5つの項目がある。児童がどのような学習経験をしてきたかを問う。既

習経験により、生活習慣・学習習慣や資質・能力に影響を与えることが想定される。

5 調査結果

5-1 「宇治学」で育てたい資質・能力の全体的傾向

資質・能力の回答は、「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらかというと思わない」「思わない」の4択になっている。「そう思う」が望ましい姿であり、「思わない」が望ましくない姿としている。「そう思う」を4点、「思わない」を1点とし、各項目の平均値をとった。平均値が2点を超えれば、資質・能力の自己評価としての肯定的な意見が否定的な意見を上回っているが、本研究では、3点以上を資質・能力が身に付いている状態、2点以下は資質・能力が身に付いていない状態として想定して分析した。分析の方法は、平均値、メディアン（中央値）、モード（最頻値）からそれぞれの資質・能力の達成度を測り、ヒストグラムによって、偏り具合や傾向を分析した⁸。

5-1-1 「宇治学」で育てたい資質・能力の全体的傾向の分析

各学校での取り組みに違いがあることから、全体集計を個人で行わず、学校ごとに集計を行った。平均が最も高かったのは「将来・展望」の3.61である。メディアンが3.58で平均とあまり変わらず、外れ値の影響は少ない。モードも3.55であり、平均値やメディアンと大きく変わらないが、ヒストグラムを作成すると、3.5以上3.6未満が最も多く、次に、3.7以上3.8未満に次の山がある2こぶ状態で、偏りが見られる。

他に高い数値としては、「他者理解」がある。平均値は3.56で「将来・展望」に次いで2番目だが、メディアンは3.6、モードは3.7で、いずれも資質・能力の中で最も高い。ヒストグラムでは、上位層にピークがあり、全体的に高

い傾向にある。

平均値が3以上あるのは、他に、「社会参画」3.33、「協働・共生」3.14、自己理解3.02、「情報収集・分析」3、「課題発見・設定」3である。3点以上を資質・能力が身に付いている状態と判断すると、これらの資質・能力は「宇治学」の学習により身に付けられている資質・能力との評価ができる。

平均値が3以下の「思考・判断」「表現・省察」「意思決定」「計画実行」もメディアンは3以上であり、外れ値の影響を受けて平均が下がっている。このことから、著しく身に付いていない資質・能力はない。

ヒストグラムによる偏りを見ると、「課題発見・設定」、「情報収集・分析」、「思考判断」は中央に偏っており、上位層も下位層も少ない。「表現・省察」は下位層から階段状に数が増えるが、一番上位層になると極端に数が少なくなる。「意思決定」はその逆で、上位層から階段状に数が増えるが、一番下位層になると極端に数が少なくなる。「計画実行」、「社会参画」は下位層が多く、上位層が少ない二層構造となっている。「自己理解」、「協働・共生」は正規分布となっている。

5-1-2 「宇治学」で育てたい資質・能力の全体的傾向の考察

「将来・展望」の質問項目は、「今の自分より、良くなった自分を想像し、そうなりたいと思いますか」である。平均が3.61、メディアンが3.58、モードが3.55でいずれも高い数値を示しており、「そう思う」「どちらかというと思う」と回答した児童が多い。それは、自己肯定感が高いということであり、「宇治学」の学習を通じて、将来に希望を持ち、自己肯定感を高めたのなら、「宇治学」の学習の意義は大いにあるといえる。

同じく平均値、メディアン、モードが高い数値である「他者理解」の質問項目は、「自分の意

見をしっかりと話したり、友だちの意見をしっかりと聞いたりすることが、自分も友達も成長することにつながるのだと思いますか」である。この問いに対して、「そう思う」「どちらかという」とそう思う」と回答した児童が多いということは、協働的な学びができていて、その良さを実感できている児童が多いということが言える。

どの資質・能力も平均値やメディアンが3付近であることから、「宇治学」で育てたい資質・能力は全体的に身につけていると言える。

ヒストグラムによる偏りで、「課題発見・設定」、「情報収集・分析」、「思考判断」は中央に偏っており、上位層も下位層も少ないということは、これらの資質・能力の個人差は少なく、平均的に資質・能力が身につけているということである。

「表現・省察」は下位層から階段状に数が増えることから、「表現・省察」の上位層は段階的に多いことが分かる。一方、「意思決定」はその逆で、上位層から階段状に数が増えていることから、下位層が段階的に増えている。「表現・省察」は学習の最終段階のまとめ・表現で必要となる資質・能力であることから、まとめ・表現の学習は充実し、一定の成果が上がっていると考えられる。一方、「意思決定」は学習としては、自分の課題を決めたり、自ら進んで情報収集したり、学習のいたるところで必要となるが、十分身につけている状態ではないと言える。

「計画実行」、「社会参画」は下位層が多く、上位層が少ない二層構造となっていることから、計画を実行したり、社会参画をしたりすることができる児童は個人差が大きく、二極化していることが分かる。

5-2 資質・能力と生活習慣・学習習慣との関連

資質・能力と同様に、回答は、「そう思う」「どちらかという」とそう思う」「どちらかという」とそう思わない」「思わない」の4択になってい

る。「そう思う」が望ましい姿であり、「思わない」が望ましくない姿としている。「そう思う」を4点、「思わない」を1点とし、各項目の平均値をとった。平均値が2点を超えれば、生活習慣・学習習慣の自己評価としての肯定的な意見が否定的な意見を上回っているが、本研究では、3点以上を生活習慣・学習習慣が身に付いている状態、2点以下は生活習慣・学習習慣が身に付いていない状態として想定して分析した。

各学校の地域や家庭の教育力が資質・能力に影響を与えているということと、地域学習においては、地域や家庭の環境の影響が大きいという仮説の下、分析の方法は、個人集計ではなく、学校ごとの集団集計による分析を行った。

5-2-1-1 資質・能力と生活習慣・学習習慣との関連の分析（階層分析）

各資質・能力と生活習慣・学習習慣が、平均以上の学校は上位層、平均以下の学校は下位層とした。さらに、上位層を半分に分け、上位をA層、下位をB層とした。下位層も半分に分け、上位をC層、下位をD層とした。A層からD層までをグループとみなし、それぞれのグループの平均値をとって、D層からA層まで平均値が上がっていく比例関係になっている資質・能力と生活習慣・学習習慣を探し、資質・能力と関連する生活習慣・学習習慣とした。

資質・能力と生活習慣・学習習慣を4つの層に分け、A層からD層までが一致したのは、以下の通りである。

- ・情報収集・分析と達成力、ホスピタリティ、時事問題
- ・表現・省察と発信力
- ・意思決定と挑戦力、社会参加、時事問題
- ・自己理解と挑戦力、ホスピタリティ
- ・他者理解と達成力

- ・ 協働・共生と挑戦力，発信力，社会参加，時事問題
- ・ 社会参画と達成力

5-2-1-2 資質・能力と生活習慣・学習習慣との関連の分析（相関係数）

各層の中では順位が変わることもあり，平均値が比例関係にあるだけで相関関係にあるとは言いきれないことから，資質・能力と生活習慣・学習習慣の相関係数を出した。各層のデータ群は，学校ごとの集団集計のため他のデータとかけ離れた外れ値もあり，相関係数だけでは関連性を判断することはできない。そこで本研究では，外れ値の影響を受けにくい順位相関係数を採用した。相関関係があるかどうかの判断は本研究の成果として重要であるため，代表的な順位相関係数であるスピアマン⁹とケンドール¹⁰の2種類の順位相関係数を使って，分析した。また，相関係数からだけでは分布状態からの相関関係が判断できないことから，散布図を作成し，相関関係があるかどうかの判断の強化をした。

階層分析で相関関係があると考えられる資質・能力と生活習慣・学習習慣の相関係数を調べたところ，以下のような結果となった¹¹。

表1 資質・能力と生活習慣・学習習慣の相関（0.4～0.7）

	スピアマンの 順位相関係数	ケンドールの 順位相関係数
情報収集と達成力	0.57	0.41
意思決定と挑戦力	0.69	0.51
意思決定と時事問題	0.57	0.44
自己理解と挑戦力	0.59	0.46
協働・共生と挑戦力	0.58	0.40
協働・共生と社会参加	0.68	0.53

表2 資質・能力と生活習慣・学習習慣の相関（0.2～0.4）

	スピアマンの 順位相関係数	ケンドールの 順位相関係数
情報収集とホスピタリティ	0.460	0.336
情報収集と時事問題	0.49	0.38
表現・省察と発信力	0.46	0.33
意思決定と社会参加	0.46	0.32
自己理解とホスピタリティ	0.44	0.30
他者理解と達成力	0.40	0.30
協働・共生と発信力	0.43	0.31
協働・共生と時事問題	0.45	0.33
社会参画と達成力	0.40	0.31

強い相関関係がある（相関係数0.7～1）やほとんど相関関係がない（相関係数0～0.2）はなかったが，表1，表2で示した通り，かなり相関関係がある（相関係数0.4～0.7）とやや相関関係がある（相関係数0.2～0.4）は複数見られた。

5-2-1-3 資質・能力と生活習慣・学習習慣との関連（散布図）

相関係数が高い資質・能力と生活習慣・学習習慣の散布図を作成したところ，直線的な関係がありそうだと推測できるのは，以下の通りである。

情報収集と達成力，情報収集と時事問題，意思決定と挑戦力，意思決定と時事問題，自己理解と挑戦力，他者理解と達成力，協働・共生と社会参加，協働・共生と時事問題，社会参画と達成力

一方で，直線的な関係がないと推測できるのは，以下の通りである。

情報収集とホスピタリティ，表現・省察と発信力，意思決定と社会参加，自己理解とホスピタリティ，協働・共生と挑戦力，協働・共生と発信力

以上のことから，相関係数は高いが，散布図で直線的な関係が見られないものは，全体とし

て相関はあると推定できるが、学校ごとのばらつきが多く、2つの関係に相関があるとは言いきれない。そこで本研究では、層分析、相関係数、散布図の3つの要因で、相関関係があると推定できるものを、資質・能力と生活習慣・学習習慣の関連性が高いと判断する。

層分析で関連が見られ、散布図による直線関係が見られるものの中で、相関係数が高い（相関係数0.4～0.7）ものをⅠ群、相関係数がやや高い（相関係数0.2～0.4）ものをⅡ群とすると、以下ようになる。

Ⅰ群

情報収集と達成力、意思決定と挑戦力、意思決定と時事問題、自己理解と挑戦力、協働・共生と社会参加

Ⅱ群

情報収集と時事問題、他者理解と達成力、協働・共生と時事問題、社会参画と達成力

5-2-2 資質・能力と生活習慣・学習習慣との関連の考察

層分析で比例関係にある資質・能力と生活習慣・学習習慣は、それぞれのグループの中で同じような傾向があると判断できる。資質・能力と関連があると推定される生活習慣・学習習慣が一番多かったのは、協働・共生であり、挑戦力、発信力、社会参加、時事問題の4つ生活習慣・学習習慣との関連との関連が見られた。協働・共生は他者と関わっていく中でコミュニケーション力や社会性などが求められる。「宇治学」では、学び方としての協働的な学びを重視するとともに、地域の様々な人との関わりが必要となる。協働・共生の資質・能力を高めるためには、様々な生活習慣・学習習慣を身に付ける必要があるということは、協働・共生の資質・能力が身に付くようにすることにより、望ましい生活習慣や学習習慣が身に付くと考えることもできる。

生活習慣・学習習慣との関連が見られなかった資質・能力は、課題発見・設定、思考・判断、計画実行、将来・展望である。したがって、これらの資質・能力は、様々な学習や経験を通じて身に付けられる生活習慣や学習習慣を通して培うことが難しい資質・能力といえる。意図的に身に付くように指導しなければ育成することが難しい資質・能力といえる。

相関係数で「相関関係がある」と推定されるものは、それぞれの資質・能力と生活習慣・学習習慣には関連性が認められるということである。生活習慣・学習習慣の結果として、資質・能力が身に付くというように、資質・能力と生活習慣・学習習慣を結果と方法・手段の関係とみれば、資質・能力を身に付けるためには、どのような生活習慣・学習習慣を身に付けばいいのかわかる。資質・能力は抽象的だが、生活習慣・学習習慣は具体的だからである。

「かなり相関関係がある」と推定されるものの中で、数値が大きい協働・共生と社会参加では、社会参加する機会を数多くつくることで、協働・共生の資質・能力が身に付くということである。社会参加の機会は地域によって異なる。生活習慣として身に付きにくいのであれば、学習の中に組み入れ、学習習慣として身に付くように指導することが必要である。

層分析で関連が見られ、散布図による直線関係が見られるものの中で、相関係数が高いⅠ群は、特に関連性が高く、例外が少ない。

情報収集と達成力の関連では、物事を最後までやり遂げるという経験が、情報収集力の資質・能力を身に付けることになる。意思決定と挑戦力、時事問題の関連では、様々なことに積極的に挑戦する機会やニュースなどに関心を持つことが、意思決定力を高める。自己理解と挑戦力の関連では、難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦することが、自らの生活の在り方を見直し、実践する自己理解につながる。協働・共生

と社会参加の関連では、地域の行事などへの参加により、協働・共生の資質・能力の育成となるということである。

本研究で明らかにしたように、資質・能力は抽象的で身に付いているかどうかの判断が難しいが、どのような生活習慣・学習習慣が身に付いているかを判断することによって、どのような資質・能力が身に付いているかを判断できる。それはすなわち、資質・能力を身に付けさせるために、どのような学習習慣を身に付けさせればいいのかということが明らかになったということである。

5-3 資質・能力と学校・地域の特性との関連

学校質問紙の学校の状況の回答は、質問に応じる形で「よく参加してくれている」「そう思う」「大変協力的」「積極的に発信している」となっているが、いずれも4択であり、できている状況を4点とし、できていない状況を1点として、各項目の平均値をとった。学校・地域の特性の回答は、「よく行った」「どちらかというところ行った」「あまり行っていない」「全く行っていない」の4択になっている。「よく行った」を4点、「全く行っていない」を1点とし、各項目の平均値をとった。

平均値が2点を超えれば、自己評価としての肯定的な意見が否定的な意見を上回っているが、本研究では、3点以上を「宇治学」を実践しやすい状況、2点以下は「宇治学」を実践しにくい状況として想定して分析した。また、相対的に高い項目や低い項目に着目して、特に高い項目は「宇治学」を実践しやすい状況。低い項目は「宇治学」を実践しにくい状況と想定して分析した。なお、学校や地域の状況は、学校のおかれている教育環境や宇治学的資源など、様々な要因が考えられる。しかし本研究では、現在の学校の状況と児童の自己評価の関係についてのみを分析対象とし、「宇治学」実践上の課題を明らかにしたい。それ以外の要因につい

ては、さらに学校の状況を詳細に分析する必要があり、それは今後の課題とする。

学校質問紙は、各学校で1つであり、データは少ないので、統計的な傾向を見ることはできない。学校群の傾向として、層分析のみ、関連を調べた。

資質・能力と生活習慣・学習習慣との関連と同様、各資質・能力と学校・地域の特性が、平均以上の学校は上位層、平均以下の学校は下位層とした。さらに、上位層を半分に分け、上位をA層、下位をB層とした。下位層も半分に分け、上位をC層、下位をD層とした。A層からD層までをグループとみなし、それぞれのグループの平均値をとって、D層からA層まで平均値が上がっていく比例関係になっている資質・能力と学校・地域の特性を探し、資質・能力と関連する学校・地域の特性とした。

5-3-1 資質・能力と学校・地域の特性との関連の分析

資質・能力と学校質問紙を4つの層に分け、A層からD層までが一致したのは、以下の通りである。

- ・課題発見・設定と外部講師
- ・表現省察と情報教育、社会参画授業
- ・意思決定と地域学習
- ・将来・展望と学校支援ボランティア活動、授業サポート、社会参画授業
- ・社会参画と社会参画授業、地域学習

5-3-2 資質・能力と学校・地域の特性との関連の考察

「宇治学」では、「課題発見・設定」ができるように、体験活動を重視している。体験を通して、実感を伴うことにより、疑問が生まれてくる。その際、地域の人や専門家の話を聞くことによって、より本質的な問題に気づく。「課題発見・設定」のためには、外部講師の活用が必要であるということが明らかになった(表3)。

表3 課題発見・設定の関連

	課題発見・設定	GT
A	3.19	3.33
B	3.08	3.33
C	2.93	3
D	2.81	1.75
全体平均	3.00	2.99

「表現・省察」は学習段階では、「まとめ・表現」の時に必要となる資質・能力である。情報教育はコンピュータや図書の活用についての学習であり、「情報収集・分析」との関連が高いと想定されたが、「表現・省察」の方が関連は高かった。「まとめ・表現」で、コンピュータを使ってまとめたり発表したりすることがあり、そういう場合のスキルとして関連があると考えられる。また、社会参画授業は、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えさせるような授業」であり、こうした授業を経験しておくことにより、「宇治学」において、誰に向けてどういう発信をすればいいのかを考える意識が身に付くと考えられる。そのことが、「表現・省察」の資質・能力の関連として考えられると想定できる（表4）。

表4 表現・省察の関連

	表現・省察	情報教育	社会参画授業
A	3.48	3.6	3
B	3.11	3.33	3
C	2.87	3.2	2.8
D	2.41	3	2.25
全体平均	2.98	3.3	2.8

「意思決定」は主体的な学習する上で重要な資質・能力である。地域学習は、「地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会の設定」であり、主体的な学習をする上で、そのような機会が重要であるということである。「宇治学」は地域学習であるため、「宇治学」の学習に取り組むことが主体的な学習につながると言える（表5）。

表5 意思決定の関連

	意思決定	地域学習
A	3.21	3.6
B	3.04	3.2
C	2.91	3.2
D	2.8	3.2
全体平均	2.98	3.3

「将来・展望」は、自己肯定感を高める。学校支援ボランティア活動や授業サポート、社会参画授業は、いずれも地域との協力が欠かせない。学校と地域が協力し、様々な交流をすることにより、「将来・展望」の資質・能力が身に付き、自己肯定感を高めていると推定される（表6）。

「社会参画」の資質・能力は、社会参画授業をあらゆる機会を実施することによって身に付くということが分かる。社会参画授業は地域学習でなければできないので、「社会参画」の資質・能力と社会参画授業、地域学習は関連性が高いと言える（表7）。

表6 将来・展望の関連

	将来・展望	学校支援活動	授業サポート	社会参画授業
A	3.76	3.75	3	3.25
B	3.68	3.75	2.5	3.25
C	3.56	3.66	2.5	2.5
D	3.46	3.5	1.83	2.5
全体平均	3.61	3.65	2.4	2.8

表7 社会参画の関連

	社会参画	社会参画授業	地域学習
A	3.61	3	3.5
B	3.38	3	3.33
C	3.23	2.75	3.25
D	3.09	2.25	3
全体平均	3.33	2.8	3.3

6 本調査の成果と課題

本調査の成果と課題として、以下の点が挙げられる。

成果としては、宇治市全市の小学校に質問紙調査を行い、「宇治学」実践の検証を行うことができたということである。従来の実践研究に

において、教材開発や授業開発は行っても、その検証までは十分に行われてこなかった。本研究は、3年生を対象としているが、他の学年の調査の先行事例となる。

資質・能力と関連する生活習慣・学習習慣があり、それは資質・能力によって違いがあること、資質・能力によっては、複数の生活習慣・学習習慣と関連があることが分かった。

資質・能力は抽象的な概念であり、どのように身に付けられるのか、どのような状態を身に付いたと評価できるのかが曖昧である。本研究では、資質・能力と生活習慣・学習習慣の関係を明らかにすることにより、どのような生活習慣・学習習慣を身に付けさせることで、どのような資質・能力を身に付いたと考えられるのかを示すことができた。

コンピューターベースの学習指導要領となり、全ての教科・領域で資質・能力の育成が求められる中、本研究は、資質・能力の育成と評価について、示唆を与えるものとなった。

資質・能力と学校・地域の特性に関する調査では、学校・地域の特性によって、どのような資質・能力に影響があるのかを明らかにした。学校・地域によって特性は異なり、教育環境に恵まれていない地域もある。そういう不利益を挽回するために、どのような教育環境を整えることが必要なのかを明らかにすることができた。また、児童の実態に応じて、身に付けさせたい資質・能力を身に付けさせるために、どのような教育環境を整えればいいのかを明らかにすることができた。

課題としては、本研究は、3年生を対象としているが、他の学年でも同様の結果が得られるのかはわからず、資質・能力と生活習慣・学習習慣、学校・地域の特性の関連を一般化するまでには至っていない。発達段階の違いによって関係性は異なる可能性があるからである。継続的に調査をし、データを集積することによって

一般化を図る必要がある。

さらに、本研究で明らかになったことを基に、「宇治学」実践の改善を図るための指導法の開発が必要となる。

※本研究は、JSPS 科研費 (C) 17K048930001「総合的な学習の副読本作成による地域協働型教材開発と評価・改善に関する実証的研究」(研究代表者：橋本祥夫)の助成を受けたものである。なお、科研費の研究では、研究領域を分担しており、本研究に関わる部分の研究に関しては、筆者の担当として行っている。

参考文献・引用文献

- 藤本 壱 (2014) 『Excel でできるらくらく統計解析』、自由国民社
- 橋本祥夫、森正美、鶴飼正樹、寺田博幸、澤達大、市橋公也、辻弘一 (2016) 「官学連携による「宇治学」副読本作成と現場での活用に関する研究 I」『人間学研究』第 16 号、京都文教大学人間学研究所、15-37.
- 橋本祥夫 (2018a) 「地域についての認識のレディネス分析による地域学習のカリキュラム・マネジメントー総合的な学習の時間「宇治学」第 6 学年「『ふるさと宇治』の魅力大発信」を事例に」、『心理社会的支援研究』第 9 集、京都文教大、55-69.
- 橋本祥夫 (2018b) 「総合的な学習の副読本作成による地域協働型教材開発と評価・改善に関する実証的研究ー総合的な学習「宇治学」の実践上の課題一」、『人間学研究』第 18 号、京都文教大学人間学研究所、31-44.
- 菅民郎・土方裕子 (2009) 『すぐに使える統計学』、ソフトバンククリエイティブ
- 内藤統也・秋川卓也 (2007) 『文系のための SPSS 超入門』、プレアデス出版

注

- 1 JSPS 科研費 (C) 17K048930001「総合的な学

習の副読本作成による地域協働型教材開発と評価・改善に関する実証的研究」(研究代表者:橋本祥夫)

- 1 質問紙調査の分析という点では、事前と事後の違いはあっても共通することはあるので質問紙の説明や経緯など一部重なる部分がある。
- 3 小学校学習指導要領(平成29年3月公示)では、総合的な学習の育てようとする資質や能力及び態度については3つの観点を踏まえることが示されている。
- 4 実際に回答するのは該当学年の教員である場合が想定されるが、質問紙の説明文書に「校長の責任で回答してください」という文言を入れ、教員の個人的な感想にならないよう学校として責任ある回答を求めた。
- 5 調査の実施については、教育委員会に調査の趣旨を説明し、教育委員会から各学校に依頼して実施している。人権上の配慮、趣旨の理解をしてもらい、保護者の協力を得た上で実施している。
- 6 生活習慣・学習習慣の質問内容は、全国学力学習状況調査の質問紙の中から、宇治学(地域学習)を行うにあたり、関連性があると思われる質問文を抽出した。全国学力学習状況調査の質問紙なので、学力(資質・能力)との関連性が高いものが提示されており、質問には妥当性があると考えた。
- 7 学校・地域の特性に関する質問も、全国学力学習状況調査の学校質問紙の中から、「宇治学」(地域学習)を行うにあたり、関連性があると思われる質問文を抽出した。
- 8 分析のための参考資料として、以下の書籍を参考にした。藤本壺(2014)『Excelでできるらくらく統計解析』, 自由国民社, 菅民郎・土方裕子(2009)『すぐに使える統計学』, ソフトバンククリエイティブ, 内藤統也・秋川卓也『文系のためのSPSS超入門』, プレアデス出版
- 9 スピアマンの順位相関係数は、2つのデータ群

のそれぞれ小さい方から順位をつけ、その順位に対してピアソンの積率相関係数を計算したものである。

- 10 ケンドールの順位相関係数は、データ群から2組ずつのデータを取り出し、その大小関係から係数を計算するものである。
- 11 相関係数の値は、常に-1以上1以下になるという性質がある。相関係数がプラスの場合、それら2つのデータ群は正の相関関係があるという。一方、マイナスの場合は、それら2つのデータ群には負の相関関係があるという。さらに、相関係数が0に近い場合、2つのデータは無相関であるという。また、相関係数が1に近いほど、相関関係が強いということが出来る。なお、小数第2位までを有効とし、以下切り捨てに表示した。